

ローマ日本人学校における国際理解教育の実践

前ローマ日本人学校 教諭

北海道帯広市立大空中学校 教諭 金 元 弘 子

キーワード：国際理解教育，総合的な学習の時間，進路

1. はじめに

ローマはイタリア共和国の首都であり2000年以上の歴史を持つ。古い建物をむやみに壊してはならないという条例のため、遺跡や道路がほとんど昔のまま残っている。「コロッセオ」「トレビの泉」「フォロ・ロマーノ」「カラカラ浴場」名前を挙げていけばきりが無い。それら史跡に付随する美術館・博物館、優れた美術品を有する教会などを巡るため、世界中から観光客が集まる。そのローマ市内 Casetta Mattei 地区にローマ日本人学校は位置し、約50名の子どもたちが学んでいる。

ローマ日本人学校は1975年に、ローマ日本語補習校として発足し、1990年に日本国政府より正式に日本人学校として認可された。1996年にはイタリア政府から正式に学校として認められた。2003年には、現在校舎がある Casetta Mattei 地区に校舎を移した。子ども達の滞在年数は平均して2年～3年。大半の子どもたちは保護者の勤務の関係で、イタリアのローマに住んでいる子どもたちである。数年ローマで過ごした後、国内の学校に戻る。低学年の子どもたちは、日本の学校生活の経験を持たない子がほとんどである。いずれは日本の学校に戻ることを考えると、スムーズに日本の学校に適應するために、日本と同じシステムの日本人学校の役割は非常に多いと感じる。反面、高学年、中学部の子ども達は日本の学校を経験してきており、学力の保持という要求は非常に高いものがある。

2. 校内研究の内容

(1) 2007年度 ローマ日本人学校校内研究 研究主題

豊かな国際性を身につけた児童生徒の育成
～ローマの時間・生活科と特別活動による体験活動を通して～

① 研究の目的

ローマの時間（総合的な学習の時間）・生活科・特別活動において、豊かな国際性を育てるための指導と評価の在り方を究明する。

② めざす子ども像

イタリアのひと・もの・こととのかかわりを通して、イタリアの歴史・文化・習慣などについて理解し、協調して生きようとする事ができる。

③ 研究の仮説

ローマの時間（総合的な学習の時間）・生活科・特別活動において現地理解のための教材開発、児童生徒の国際性の高まりをみとめる評価の工夫、発達段階に応じた系統性のあるカリキュラムづくりを行えば、豊かな国際性を身につけた児童生徒が育つであろう。

3. 学習の実際

(1) 題材設定の理由

研究の仮説にあるように「発達段階に応じた系統性のあるカリキュラムづくり」を開発することが早急な課題と

感じた。特に中学部の子どもたちの発達段階にあった「ローマの時間」の教材を目指し、進路の学習をかねた教材開発を計画した。イタリアに生きる人に視点をあて、その生き方に触れるなかで、自分の進路について考える学習を試みた実践である。イタリアの伝統的工芸の職人、学校の周辺で働く人々、国際社会で活躍する日本人、日本語を学習するイタリア人にコンタクトをとり、体験学習および職場見学やインタビューを行った。学校の中だけではなく、外に出かけていく中でイタリアならではの学習を行い、広い視野にたつて自分の進路について考える一つの機会とさせたかった。

(2) 評価の観点項目

関心意欲態度	イタリアで生活している人々に興味をもち、その生き方に触れる中で自分の進路について考える。
問題解決	身近な生活の中で、課題を設定し課題解決する力を養う。
コミュニケーション能力	体験的な学習を通して、身近な地域社会とふれあいコミュニケーション能力を育てる。学んだことをわかりやすく伝えたり、まとめたりする能力を育てる。

(3) 実践記録 中学部 「ローマの時間」 「イタリアに生きる人々に学ぶ」

① 単元「イタリアの魅力や知りたいことをあげよう。」(2時間)

指導目標

イタリアの魅力を感じながら、主体的にこれからの活動に参加しようとすることができる。

「イタリア」「職業」「生きる」をキーワードにウエッピングマップをつくり、生徒の興味関心をふくらませた。生徒の「イタリアに働く人々」に対するイメージは、「歴史」「音楽」「食」「サッカー」「遺跡」「美術」「教会」「職人」などであった。生徒の滞在年数によって、興味関心の広がり方が違った。

② 単元「イタリアで生活する職人に興味をもち調べよう。」(10時間)

指導目標

イタリアの文化、そのよさを理解しようとする
ことができる。
職業についての考え方を
知ることができる。

他教科との関連

「イタリア語」
活動の中で必要と思われる
会話の練習

この学習のオリエンテーションで作ったウエッピングマップの中にあつた「職人」に着目し題材を設定した。イタリアの昔からの仕事を継承している「職人」に的を絞ってイタリアの文化や日本の文化の違いや、その地域になぜ「職人」が多いのかを追求する学習を展開した。ここでは「額縁職人」「紙細工職人」「靴職人」「木工細工職人」にインタビューすることを通して、仕事に対する個々の思いやその仕事振りを見ることができた。この題材を設定する上で新しく派遣された「国際交流ディレクター」と共に、ローマ市内の職人が工房を並べるオルソ通りに何度も足を運び見学を受け入れてくれる工房を探した。国際交流ディレクターの導入により指導者だけでは見つけられなかった地域素材の発掘がスムーズにできた。それを指導者が学習の題材に練り上げていくことができ、連携をとりながら教材開発を進めることができた。



③ 単元「イタリアで生活する日本人に興味をもち、どんな職業があるか調べよう。」(8時間)

<p>指導目標</p> <p>イタリアの文化、そのよさを理解しようとするができる。 職業についての考え方を知ることができる。</p>	<p>他教科との関連</p> <p>「学級活動」 職業調べ</p>
--	---------------------------------------

海外で働く日本人。世界各国には「海外だからできること」を求めて在住している日本人がたくさんいる。イタリアも、音楽関係、美術関係、料理、修復などイタリアを修業の場、または働く場とし生活している日本人が多い。この単元では「企業ではなく、個人で事業を興し、イタリア社会の中で働く日本人」に焦点をあてて職場見学、インタビューをお願いした。イタリアに夢を求めて、ローマの中心部に日本女性の方がレストランを経営しており、1日職場体験、海外で暮らす上の大変さや、人生観等を伺った。また長年のローマでの生活から、イタリアと日本の文化、生活、考え方の違いについて子どもたちとともにディスカッションしていただいた。

④ 単元「職場体験をしよう」(8時間)

<p>指導目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・働くことの意義や自己の職業に対する意識を高め、望ましい「職業観」や「勤労観」をもって意欲的に学習に取り組む。 ・職場体験で多くのイタリア人と接することを通し、人間関係の大切さを知り国際社会に生きる人としての資質を高める。 	<p>他教科との関連</p> <p>「イタリア語」 必要と思われる会話の練習 「国語」 意見文を書く</p>
--	--

学校周辺にある「文房具屋」「レストラン」「ケーキ屋」「スポーツセンター」「庭師」「パール(コーヒーショップ)」にて、1人で3日(1日2時間)職場体験に行く。校舎移転後4年間で、前任の派遣教員や現地採用の教員、国際交流ディレクターが学校周辺の店や施設にコンタクトをとり、趣旨を理解してもらいながらつながりを築いてきた。イタリアの社会は、こうして時間をかけたつながりを大切にすると聞く。子どもたちは、職場体験の内容よりもたった一人で、イタリア人の職場の中に入ることに心細さを感じていた。イタリア語が分からなくても、なんとかコミュニケーションをとりイタリア人の方と接していく体験は非常に意義があると感じた。3日目はだれもが満足してもどってくる姿が印象的であった。

⑤ 単元「イタリアで生活する日本人に興味をもち、どんな職業があるか考える。」日本企業訪問(10時間)

<p>指導目標</p> <p>身近に働く人の仕事を理解し、自己の生活を見直すことができる。 職業についての考え方を知ることができる。</p>	<p>他教科との関連</p> <p>「国語」 礼状を書く</p>
--	--------------------------------------

日本人学校の保護者が働いている、日本企業ブリヂストンのテストコースの見学および、日本人の方にインタビュー。テストドライバーが運転する車に乗り、テストコース内のドライブを体験。ローマ郊外に東京ドームの30倍の広さを持つ、テストコースがあり技術開発がおこなわれている。3人の日本人の方に、技術開発の仕事におけるやりがいやイタリアの方と一緒に働く感想を聞くことが出来た。訪問の後に、子どもたちが作ったレポートと礼状によると、「エンジニアとしての仕事のやりがい」という話が、強く印象に残っているとの感想が多かった。

⑥ 単元「イタリアの大学生と交流しよう」ローマ大学訪問（10時間）

<p>指導目標</p> <p>イタリアの大学生の考え方を知ることにより、進路選択の視野を広げることができる。</p> <p>イタリア人から見た日本の印象を知ることにより、自国についてよりよく知ろうとする。</p>	<p>他教科との関連</p> <p>「学級活動」</p> <p>職業調べ</p> <p>上級学校調べ</p>
--	--

ローマ「ラ・サピエンツァ大学」(Universita degli Studi di Roma“La Sapienza”)日本語学科で日本語を学ぶ学生3人に大学構内を案内してもらった。その後、日本語で自己紹介やお互いに質問をしあい大学生活や語学について会話をしていた。その会話のなかでは「日本のアニメの事」「日本とイタリアの生活の違い」「イタリアの大学のシステム」等が話されたようである。子ども達からは「イタリア人の目からみた日本の様子や日本の文化の話聞くことにより日本の良さを再発見できた」という感想を聞くことができた。イタリアの日本語学習者の数に対して、それを生かした仕事が少ないという実態や、イタリアの大学を卒業するには何年もかかる人が多い、大学を卒業しても仕事がないなどイタリアの社会情勢なども子どもたちにとっては興味深かったようである。

⑦単元「国際社会に生きる人々に学ぶ」

国際連合食料農業機関（food and agriculture organization）訪問（12時間）

<p>指導目標</p> <p>国際機関で働く人々の仕事を理解し、進路選択の視野を広げることができる。</p>	<p>他教科との関連</p> <p>「社会」</p> <p>「道徳」</p> <p>国際社会</p>
--	--

ローマには国際連合食料農業機関（FAO）世界食糧計画（WFP）国際農業開発基金（IFAD）の3つの国連組織の本部がある。国際連合食料農業機関（FAO）には日本人学校の保護者も勤務しており、見学やインタビューの便宜を図ってもらうことができた。多国籍の人々が一つの建物の中で働く国連機関内部の見学、国際機関について、世界の食糧情勢などを聞くことができた。この学習はインタビューだけではなく生徒が事前にFAOについて調べたことをFAOの日本人職員の前で発表する形式をとった。また日本人の若手国連職員の方からは、進路選択の動機などを聞くことができた。「イタリアに生きる人々に学ぶ」の進路学習は「イタリアの職人」「イタリアで働く日本人」などいろいろな観点から職場見学や体験学習を行ってきたが、最後はイタリアだけではなく広く世界に目を向けた学習で締めくくることができた。



4. おわりに

「海外にいるからこそできる学習」を念頭に教材開発を進めてきた。特に派遣3年目はローマ市内に豊富にある美術館、遺跡などの物的学習材だけではなく、そこに携わる人、そこに生きる人的資源に注目して人と人のつながりを重視した学習を積み重ねたいという思いで教材開発にあたった。研究を進める上で豊かな国際性とは何かということ問いながら進めてきたが、子どもたちが視野を広げて、異質なものを認め尊重していく国際人に育っていくことを願って設定した学習である。そのためには、指導者自身が広い視野にたつて、子どもたちに伝えたいものを明確にしていく必要があることを実感した。派遣期間の3年間は、価値観、文化あらゆる面から多様な物の見方を学ぶことができた貴重な3年間であった。